

観光文化

Tourism & Culture



財団法人日本交通公社

特集◎ 九州観光交流新時代 — 花開くアジアの玄関

◆巻頭言

九州におけるアジア誘客戦略 石原 進……①

◆特集

- 九州におけるアジア・インバウンドの拡大
— その課題と方策 千 相哲……②
- 文化観光への視点
— 博物館の役割 三輪 嘉六……⑦
- 十一年目を迎えた APU (立命館アジア太平洋大学)
— アジア太平洋地域の人材養成と未来創造を目指して 山神 進……⑩
- 九州観光推進機構のアジア・インバウンド戦略 大江 英夫……⑭

◆視点

- 観光地における図書館の役割
— 観光客にも利用され、観光地の持続的発展に寄与する図書館とは 朝倉 はるみ……⑱

◆連載

I あの町この町 第39回

起業精神 — 埼玉県深谷市 池内 紀……⑳

II 風土燦々⑫

温泉と茅葺きの神通力 (上) — 宮城県石巻市北上町 飯田 辰彦……㉘

III ホスピタリティーの手触り 60

万博の上海にて 山口 由美……㉓

◆新着図書紹介……㉔



北国街道・海野宿

信州東御市とうみにある海野宿うのは中山道追分宿から越後高田に至る約百四十キロメートル（三十五里）の北国街道の宿場として、二六二五年（寛永二年）に開設された。江戸時代には佐渡の金銀を運んだ道でもある。道の中央を流れる用水に柳並木が美しい光景を添える。

格子戸の家並みが東西約六百五十メートルにわたり連なる景観は、江戸時代をほうふうさせる風情を今に伝える。往時、二十三もの旅籠はたしが軒を連ねていたという。江戸の後期には養蚕も盛んに行われたので堅牢な蚕室造りの建物が調和していて実に素晴らしい映像美をつくり上げることができた。特に「海野格子」と防火のための「卯建うだん」が目を引く。私が取材に訪れた時、サルビアの花が街並みとマッチして見事な景観をつくり上げていた。一九八七年、重要伝統的建造物群保存地区に指定されたのもうなずける。江戸時代後期、俳諧の世界に身を置き、異風の俳諧師として名を成した小林一茶もこの街道を歩いたことだろう。

（写真・文 樋口健一）

今年五月に九州観光推進機構会長に就任した。当機構は二〇〇五年に九州観光推進のため九州七県と経済界が一体となって作った組織であり、地域単位で共通の課題に取り組みという点で、道州制の先駆けとも言える組織である。

九州の観光戦略には三つの鍵がある。まず一つは地域を徹底的に磨くこと、次に国内から観光客を呼ぶこと、そして三つ目は海外からの誘客である。現在、九州にとっては地理的に近い韓国が最も大きなマーケットだが、実質世界第二位の経済大国となった中国も重要なマーケットであり、すでに日本国内、そして海外の観光地による中国人観光客の誘客競争が始まっている。

九州には現在、クルーズ船で多くの中国人観光客が訪れており、博多港だけで今年は六十六回の寄港が予定されている。しかしながら中国からの宿泊者数で比較すると、東京や北海道に大きく水をあけられてしまっている。

九州は、歴史、文化、自然、食など、東京や北海道に引けを取らない観光資源を有している。しかしこれらの地域と比較すると、観光地としてのイメージに欠けており、誘客に向け、九州として統一的なイメージを打ち出していかなければならない。

九州におけるアジア誘客戦略

九州観光推進機構会長

石原 進

また、九州は古くは中国大陸や朝鮮半島など海外との玄関口の役割を果たしてきたが、アジア大交流時代を迎えようとしている現在、アジアからの観光客の受け入れ態勢について改めて見直す必要がある。

例えば、海外から来てもらうためには、玄関口として十分な容量・設備を有する空港や港湾が必要であるが、福岡空港はすでに容量限界に近づいているし、博多港に寄港するクルーズ船は貨物船の埠頭ふちを使用している。中国語を話せる人材の育成や、外国語の地図や案内標識の充実も必要であろう。ほかにも、旅行の楽しみである食事や買い物を楽しんでもらうため、食事については写真が付いたメニューの整備、買い物については決済用のインフラ整備や両替への対応にも取り組んでいかなければならない。

さらに、これは九州だけの問題ではないのだが、国を挙げて海外からの誘客に取り組むのであれば、ビザ発給要件の緩和や入国審査体制の充実は重要な課題であろう。

そして、最も大切なことは観光客に対するホスピタリティである。観光客を大事にするという気持ちを官民で共有していく――、まずはここから取り組んでいきたい。

(いしはらすすむ)

九州観光交流新時代

花開くアジアの玄関

国の重点施策として、観光振興、とりわけアジアからの訪日外国人旅行に期待が寄せられています。今号では、『九州観光交流新時代』をテーマに、九州における観光交流の現況やインバウンド振興へのさまざまな取り組み、今後の課題・方策などについて紹介します。

九州におけるアジア・インバウンドの拡大

——その課題と方策

九州産業大学 商学部長・教授

千 相哲

九州は、歴史的にも文化的にもアジアとの付き合いが深く、東アジアに近いという地理的優位性を生かして、早くから東アジアからのインバウンド誘致に取り組んできた。今後、経済成長が著しいアジア諸国・地域からのさらなる来訪が期待されているが、九州でアジア・インバウンドの拡大のためにどういった対応が求められているのかについて、九州インバウンドの事情を踏まえ、観光振興の視点から考えてみたい。

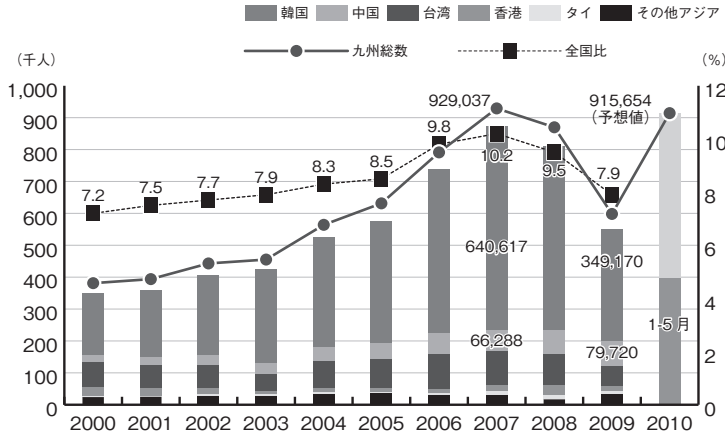
九州インバウンドの現状

法務省の「出入国管理統計」（二〇〇九）によると、九州への入国者数は、二〇〇七年に全国シェア一〇・二%まで伸びていたが、〇八年下半期ころからの世界金融危機と燃油サーチャージの高騰による影響で〇九年には大幅な減少に転じ、シェアも七・九%に減少した。幸いに一〇年一～五月の入国者数はピークの〇七年同期に匹敵するまでに回復し、再び増加の兆しを見せている（図1）。

九州インバウンドの特徴は、アジア、特に韓国人旅行者の割合が高いことである。二〇〇九年で見ると、アジアからが全体の九一・五%を占め、全国の七二・二%と比べて高く、韓国人旅行者が全体の五八・四%（全国二四・二%）と突出している。ほかに中国が二三・三%（同一六・三%）、台湾が一〇・三%（同一四・八%）を占めているが、最近、台湾人旅行者は減少し、中国人旅行者が増加傾向にある。

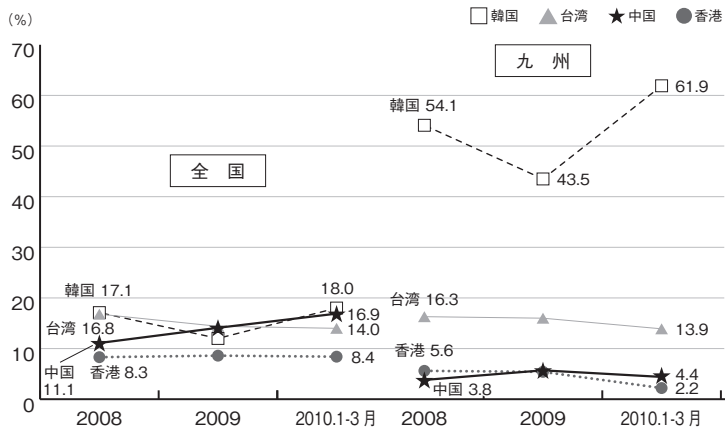
観光庁の「宿泊旅行統計」によると、外

図1 九州の国・地域別外国人入国者数の推移および全国比



注：①資料：法務省「出入国管理統計」、②2010年の915,654人は、2006年と2007年の1～5月の入国者数が年間で占める平均割合から年換算値を求め、推計した値である。③2000～2009年の棒グラフの合計は、九州総数のうちアジアからの入国者数の値である。

図2 全国・九州のアジア主要国・地域からの旅行者の割合 (従業員数10人以上の宿泊施設)



資料：観光庁「宿泊旅行統計」

韓国旅行者増加の要因としては、ほかに一九九八年十月から韓国で始まった日本の大衆文化開放、二〇〇二年の日韓ワールドカップ共同開催、日本での韓流ブームなどで日韓の相互理解が深まったことや、二〇〇〇年代に入ってからウォン高が進み旅行しやすい環境になったのと同様に、九州のゴルフ場、ホテル、旅行エージェントなどに

の要となっている(図3)。

国人延べ宿泊者数も二〇一〇年に入って増加しているが、全国的には中国が最も大きく伸びているのに対し、九州では韓国が大きく伸びている(図2)。延べ宿泊者は福岡県が最も多く、次いで長崎県、熊本県、大分県の順となっている。韓国からの旅行者の割合はすべての県で最も高いが、特に熊本県と大

分県が高い。中国からの旅行者は佐賀県と宮崎県が、香港からの旅行者は宮崎県と鹿児島県が、台湾からの旅行者は長崎県と宮崎県が、それぞれ九州の他県と比べて相対的に高く、市場別に特色が見られる。九州インバウンドが韓国人旅行者に特化している背景には、釜山〜博多間を結ぶカ

メリアライン(船内泊、週六〜七往復)のほか、JR九州が一九九一年に運航を始めた博多〜釜山間を約三時間で結ぶ高速船ビートルと二〇〇二年からの韓国船籍のコービー(〇六年から共同運航、毎日三〜八往復)の運航による航路・便数の増加、ダイヤの改善が図られたことが大きい。九州への入国者全体の約八割を占めている福岡空港と博多港は、まさに九州の玄関口と言えるが、その中で韓国人利用者が九割以上を占めている博多港(福岡空港四七・五%)は韓国人旅行者誘致

韓国系企業が進出したことによつて、韓国系企業による韓国人旅行者の誘致といった構図が作られ、人とカネの循環等、連鎖効果が生まれたことなどが挙げられる。もう一つは、福岡市をはじめ九州の多くの地域が、国内観光客の伸び悩みに対し、官民一体で韓国人旅行者の誘客に積極的に取り組み、外国人にも優しいまちづくりを進めてきたことである。

今後の展開

●「異日常」を楽しむ韓国人

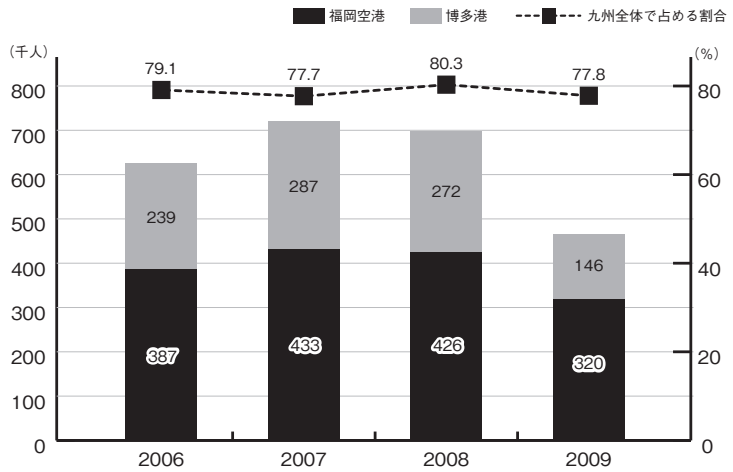
個人旅行者の増大

筆者が福岡・釜山合同の「アジアゲートウェイ2011実行委員会」の後援で行っている「日韓観光動態調査」によると、九州を訪れる韓国人旅行者のリピート率は約三割である。観光目的のこれらの韓国人旅行者は、まず、九州一の繁華街である福岡市の天神や有名観光地を見て回り、リピーターになつては福岡市内で日本人の日常を自分たちの「異日常(第二の日常)」として楽しもうとする動

きが見られる。例えば、行きつけのコーヒーショップ、美容室、居酒屋があったり、自転車で街を回遊したりするなどの行動である。これには、インターネットによる情報の影響が大きい。九州を訪れる観光客の約五〇%がインターネット(うち、半数が韓国語ブログ)を観光情報源としている。海

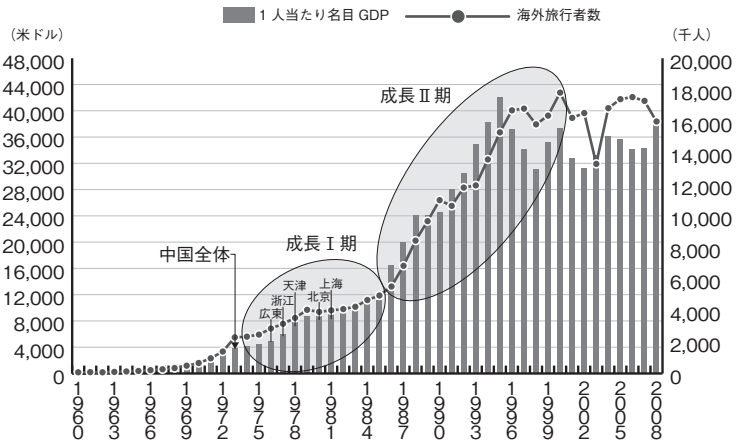
外旅行の阻害要素の一つが「不安」であるが、「ブログ」がこの不安を取り除く役割をしている。「ブログ」の中には、衛星写真と地図を駆使しながら店・建物を写真付きで紹介し、アクセス方法やサービス評価、韓国語への対応有無など、きめ細かい情報を出しているものも多い。日本語が分からな

図3 福岡空港と博多港の外国人入国者数の推移および九州比



資料：法務省「出入国管理統計」

図4 日本の1人当たり名目GDP、海外旅行者数の推移と、中国の2008年地域別1人当たり名目GDP



資料：経済企画庁「国民経済計算」、JNTO「国際観光白書」、中国国家统计局「中国統計年鑑」

い人でも「ブログ」からの情報を頼りに観光できるようになってきている。ブロガーの中にはハードブロガーが存在し、最新の流行やホットな観光スポット情報を発信してリピーターの拡大にも貢献している。

時間・経済的距離の短縮とともに感性や価値観を共有する共通の若者文化が發展しつつあるなかで、このような観光情報の助けもあり、九州は韓国人の気軽な海外観光地として位置づけられ、異日常体験を求め、傾向がますます強まると予想される。

中国発着のクルーズ客船の寄港が九州を売り込む好機

中国に対しては、二〇一〇年七月から、年収二十五万元（約三百三十六万円）以上の富裕層に限られていた個人向けビザの発給が年収三万～五万元（約四十万～六十七万円）の中間層にも拡大され、旅行対象者は四千万人を超える見通しである。経済活動の水準を表す一人当たり名目GDPが三千ドルを突破し（〇八年）、海外旅行が活発化するといわれている四千ドルを超えている省・直轄市の人口は約四億七千万人に達する。日本の海外旅行の成長曲線を見ると、

四千ドルに近づく一九七三年に日本の成長Ⅰ期が始まり、八五年の一万五千ドルの経済規模とプラザ合意の円切り上げによって成長Ⅱ期のような急速な増加が見られた。中国はすでに日本の成長Ⅰ期に入っており、程度の違いはあるにせよ、海外旅行者の増加が大いに期待できる。

しかし、中国人旅行者がすぐに九州を訪れるというのは時期尚早の感がある。前述したように全国と九州の中国人受け入れの状況が異なっているからである。現在、中国人観光客の主な訪問先は、東京、名古屋、



市内観光を終え、帰船する中国人旅行者（写真提供：福岡市）

大阪を結ぶいわゆる「ゴールデンルート」およびその周辺地域が圧倒的割合を占めており、地方都市への観光は非常に少ないのが現状である。日本と韓国がかつてたどった初期の海外旅行の経験、すなわち、目的地は先進国の大都市や定番の有名観光地、観光形態は団体周遊型、観光目的はショッピングというのが主たる旅行スタイルであったように、中国人旅行者の関心事も旅行スタイルもこれに似ているところが大きい。

このような状況で、九州は中国発着クルーズ客船寄港の好機をとらえている。二〇〇八年には百五十八隻（博多港六十六、長崎港四十一、鹿児島港四十一、その他九）に増え、約十二万九千人が訪問する予定である。クルーズ客船の寄港は、将来、個人客となる中間層に対し、他の地域よりも先に情報発信や受け入れ態勢の整備に取りかけられるという意味で九州の強みを生かせる大きなチャンスと言える。

九州インバウンドの拡大に向けて

●短期、中・長期双方の視点

韓国人旅行者に特化し、それによる変動

に大きく左右されてきた九州のインバウンドをより安定的に拡大させる上で鍵となるのが、人口、経済成長ともに増加が大きいアジアである。現在の大きなマーケットである韓国に対しては、これまでと同様に増えている個人旅行者の観光ニーズの変化に対応できるまちづくり、現地ツアー商品の造成、観光地間のアクセスの向上を、中・長期的には、中国をはじめとするアジア新興国をターゲットに認知度向上と受け入れ態勢の整備を進めていく必要がある。

●九州の観光拠点づくり

九州のイメージ、シンボルはいまだ定着していないと思われるが、海外からの玄関口となっている福岡を九州の観光交流拠点として位置づけ、集客機能を充実・強化してはどうか。来春の九州新幹線全線開業によって九州のインバウンド、アウトバウンドともに大きく変化し、九州全体の魅力が高まることが期待されるが、福岡が九州のあらゆる交通や観光情報提供の機能を担い、また外国人同士が観光情報を交換し交流できるような施設の充実を図り、社会性を創り出すことである。

●連携による集客と競争による魅力創出

九州が一つの観光圏として、国内・国際競争力を高めるためには、観光クラスターの形成を目指し取り組む必要がある。九州各県にはそれぞれ地域性が存在し、さまざまな体験、長期滞在、保養メニューなどの観光モデルが多くある。地域・行政間の連携や地域に散在する人的資源、機関・施設のネットワークづくりを図るとともに、地方都市は、福岡にはない自然や歴史・文化を都市機能に取り込むことである。九州が観光拠点を中心に集客に取り組み、九州各県が競い合いながら地域の魅力を打ち出すことによって、九州のイメージやシンボルの形成、九州ならではの新しい観光メニューやサービス開発の促進につながる。

●情報発信力の強化と国際交流意識の向上

韓国人旅行者の訪日リピート率が六割であるのに対し、地理的に近い九州へのリピート率は三割程度である。訪日旅行の多い韓国でさえ、関東・関西への旅行経験があっても九州を訪れる人はそれほど多くないということの意味している。韓国に対して市場開拓の余地が十分あると言えるが、中国

に対しても、知ってもらうことが不可欠である。そのためには、地道な誘致活動と国と属性別の訪日動機や関心に合わせた情報発信力の強化が求められる。九州に在住する留学生（九州は全国の一一・四％、〇九年）や外資系企業との連携による情報発信と経済的なプロモーションに取り組みことも一つの方策であるが、特に中国に対しては、修学旅行・教育研修等による国際観光交流の促進、観光姉妹都市制度、国際交流などによるインバウンド促進が望まれる。さらには、クルーズ客船で訪れる中国人旅行者の声を聞くとともに、短い滞在時間の中で、個人旅行で来てみたくなるような満足と感動を地域ぐるみで提供できるようにすることが大事である。

●九州観光統計の整備

九州と全国とはインバウンドの状況が異なる。現場の実感値の根拠となる統計データの提供を求める声が増えているが、九州各県の観光データのユーザーからの要望も取り入れながら、九州全体で共有できるインバウンドのデータを整備することも重要である。

(せん そうつつ)

文化観光への視点——博物館の役割

九州国立博物館長

三輪 嘉六

はじめに

文化財を観光にどのように活用するか。この問題は早くからの課題であり、文化財と関連の深い博物館が観光の対象になるというあり方を文化観光として位置づけたい。

観光は、どちらかといえば営利を求める価値体系であり、文化財が体現している価値体系とは別のものであるが、この一致あるいは調和を目指していくことが文化観光の基本と言えよう。ここでは、博物館に向けた期待、そして二〇〇五年十月に開館した九州国立博物館の取り組みに見る文化観光への二、三について触れてみたい。

博物館の諸事情

博物館の役割には、博物館資料の収集・

保管・活用・調査・研究・教育普及が課せられており、ここでいう博物館資料はそのほとんどが文化財のことを指している。その制度的な位置づけは文化財保護法に基づいていることは言うまでもない。まず、この制度の保護の意味を整理しておく必要がある。保護の用語は「保存」と「活用」の両方の意味を意図して用いられている。つまり活用は、例えば博物館や美術館など文化財の公開施設で展示されることを意図している。

文化財から国や地域のアイデンティティーや歴史・文化などを知る活用は、観光というあり方とも連動する。もともと「観光」は中国の易経の言葉から生まれ、「国ノ光ヲ観ル」、すなわち「他国の輝かしい文物を視察する」という意味が込められており、そうした点では文化財の活用と観光の両者

には共通の接点がある。

日本の博物館の多くは一九五一年（昭和二十六年）に制定された「博物館法」に基づくが、その運営形態の相違によって登録博物館、博物館相当施設、博物館類似施設に分類される。また、歴史系、美術系、科学系、自然系（動植物園、水族館）と、大変に多様な内容で存在している。そしてこれらは、基本的には社会教育的内容（生涯学習）の理念で整理され、求める姿は教育的な見方に中心が置かれている。強いて言えば、ここではこれまで文化観光としての視点が欠けていたことは否定できない。

しかし、今日の博物館事情は、博物館の存在する地域の文化的特性をしっかりと主張し、多くのところでは、いわゆるお客様サービスという理念も浸透してきている。ただ、来館者に何を訴え、何を主張してい

くかといった個性的表現はまだまだ乏しいと言わざるを得ない。

また、時には九州にある博物館が連合体でもって共同テーマを掲げるような発想は、九州の個性を知る上にも魅力的な取り組みのように思える。共通テーマとしてさしずめ邪馬台国問題など想定できよう。今、九州で邪馬台国所在地として推定されているのは三十カ所以上といわれており、沖縄を含む九州各県に推定地があるようだ。九州の各県で邪馬台国をテーマにした展示があつてよい。それも少し工夫して同時多発的に実施する。関心の深いユーザーは九州を一周して見学し、学習し、それぞれの地域の特性が邪馬台国にどのように反映しているか、それぞれの地で楽しむ。これは、西国大名や近代遺産でも九州各地が共通して扱えるようなテーマとなるはずである。こうした理念で博物館自身が新しい挑戦を行っていくことも必要になつてきているのではないかと考える。もちろん、これを実施することの体制や経済的な課題は多いが、少なくともこんな新鮮さをユーザーに発信し続けることが、文化観光への活性化につながつていく。

九州国立博物館では

日本には国立博物館が四館ある。この博物館は運営の理念や設置の目的など、各自治体のそれとは異なる。文化財保護法に連動して文化財を保存し、活用していくことに基軸を置いている。こうしたなかで、九州国立博物館はアジアとの交流を基本コンセプトにしている。特に弥生時代以降、九州と中国、朝鮮半島、東南アジアとの関係は密であつた。中国大陸に渡つた遣唐使にとつても、九州・博多は重要な中継地であり、拠点でもあつた。中世の日宋・日明交易にしても、そこには博多商人から禅文化など、交流に基づくさまざまな面での文化的形成があつた。もちろん、ヨーロッパとの間の交流にしても、大航海時代では東インドシナ会社を介した交流は九州の地に大きな影響を与えてきた。

こうした往時の国際的な関係をできるだけ博物館活動に生かすことを中心に置いている。また、博物館の多目的な活用も精力的に行っている。ミュージアムホールや大きなエントランスホールを利活用したさまざまな教育普及活用、市民による活用など、

ここだけに限定して訪れる人も多い。

博物館というと、文化財の展示・陳列が主要な活動と見られがちであることは当然であるが、九州国立博物館のこれまでの入館者数(約八百万人)の全体と、特別展、文化交流展(常設展)入場者の割合を見ると、統計的には五〇%程度である。博物館を訪れる目的が展覧会の鑑賞のみでない傾向が知れる。しかし、この場合、この来館者が必ずしも観光を目的とした入館でないことは想像されるが、この積み重ねが一つの博物館活動であり、生きている博物館としての位置づけにつながると考えられる。こうした動向は、一つのぎわいでもあるが、これを文化観光の中にどのように生かすようにしていくかは今後の課題であろう。

一方、博物館では来館者にこれまでになつた取り組みを提供している。博物館を支えている基礎の部分、つまり博物館の収蔵庫を見ることができるといわれるバックヤードツアーと呼び、申し出があればボランティアの案内によって見学でき、幅広い層から高い評価を得ている。収蔵庫は、館の文化財をはじめ、寄託、借用等の文化財

を保管し、管理する場として最も嚴重に管理されている。文化財を一定の環境下に管理し続けることが保存の基本となるわけであるが、そのための構造、あるいは保存に關する危機管理の様相など、ガラス窓越しとはいえ外から見ることができない。同じように、文化財修理の緻密で繊細な作業の様相、あるいは文化財の修理にあたっての科学的な取り組みなども、新鮮で刺激的な見学の場となっている。

今、中国・韓国をはじめとしたアジア諸国の博物館からも注目されているが、これが観光客に直結するかどうかの見極めはこれからである。しかし、国際的な各種シンポジウムやフォーラム等では必ず注目の場となっている。その点で言えば、近年アジアからの観光客が増加の一途にあるが、バックヤードは中国などからの団体の観光客層では特別の興味を示さない。このあたりはむしろエージェントの取り組み方に影響されているかもしれない。いずれにしても博物館の持つもう一つの魅力を、文化観光の視点で普遍化する努力を続けなければならぬと思っている。

さて、この外国からの入館者数の把握は

極めて難しい。博物館では日本語のほか、英・中・韓・仏・独・西の六カ国語の案内パンフレットを用意しているのですが、これの減少状況で一つの傾向をみていたが、どうも大雑把すぎた。ここ数カ月、人力でカウントすることを実験的に行ってきた。

近年、特にクルーズ船を利用して来日した中国からの入館者などが目立つが、この三カ月の統計で言えば、六月二、五五六人（二、二八六人）、七月五、〇二四人（四、七五〇人）、八月六、一五三人（五、八九〇人）である。（注：（一）内はアジア系）しかし、ここで求められているものは何か、今のところ博物館としては見いだせないでいる。知る、見る、学ぶという旅で、文化観光で育む何かがなかなか見えてこないのが現実である。

そうしたなかで、新しい試みとして取り組んでいるのが、タイ国立博物館との共同プロジェクトである。まず、学芸的な研修交流を三年ほど続け、その成果としてタイ国立博物館で展覧会を開催する。タイでのオープンに際し、日本から大勢の市民が参加する。そして、一部タイ国からの出陳物も交えて帰国展を九州国立博物館で開催し、それにタイからの大勢の市民が加わる。こ

れからはこうした博物館を通じた新しい市民交流を構築したいと考えている。来年二月に実行を予定しているが、草の根的交流を基礎に置いた相互理解の促進は、やがて文化としての観光にも目が向けられてくるだろう。新しい観光戦略の一つとして見ていく必要を感じている。

最近、国の新しい成長戦略として「観光立国」が目標に掲がっている。観光資源の一つとして、またその潜在力として文化財や博物館が視野に入るのは当然のことであるが、外国から来る人たちが自国のそれと比べた時のことを考えてみる必要がある。各国にそれぞれ立派な施設があり、特に近年、中国・韓国では、その経営や管理、運営には格段の努力と国を挙げての力がみまがっている。

一方日本では、残念ながらそこまで達せず、彼我との間に大きな差異がある。博物館行政全体の問題であるが、こんな部分を少しでも縮めていく努力と展開がないと、外国の人たちに日本の貧しい文化観光を味わせることになりかねない。

（みわ かくく）

十一年目を迎えたAPU（立命館アジア太平洋大学） ——アジア太平洋地域の人材養成と未来創造を目指して

立命館アジア太平洋大学 副学長

山神 進

大分県、別府市との協力、
多数の企業の支援により
実現できたAPU

二〇〇〇年四月、別府湾と高崎山を見下ろす別府市十文字原の高台に、日本で初の本格的な国際大学であるAPUが開学して十年を経過した現在、九十八カ国・地域からの二千九百二十一人の国際学生と三千三百十人の国内学生が、多文化環境の中で共生し、共に学ぶ、生き生きとしたキャンパスを構築している（学生の国籍別内訳については別掲表参照）。

ところで、学校法人立命館がその百周年を記念する事業として「日本初の本格的な国際大学を創設する」という構想を正式な議題としたのは一九九四年のこととされる。ちょうど同じ時期に、一村一品運動の推進

による地方の活性化を進め、内外から多くの注目を集めるようになっていた大分県は、青年が多数集う大学、日本やアジアに貢献できるような大学の誘致を真剣に模索していた。このような両者の検討が交錯するなかで、立命館としては新しい国際大学を大分県に設置する方向で、大分県と別府市は土地の提供などを行うことで大まかな輪郭が描かれ（もともと一私学のために土地を無償で提供することや、高原を掘削し整備することに對する一部の市民の反対があったこともよく知られているが）、大学の設置の認可に向けて文部省との折衝や学生の確保に向けての検討が本格化することになる。この意味で、APUは、大分県と別府市に依拠するところが多く、大学開設後は学生や教職員が地方とともにある大学という意識を持って、教育・研究活動や課外活動に

取り組むこととなっていたのである。大学の新設には文部省（現在は文部科学省）の認可が要るが、すでに少子化の始まっていた一九九〇年代の半ばの時点では、既存の大学と似通った内容の新大学構想では認可が得られる見通しが立たないこともあって、当時の関係者は、その時点での状況から判断すると破天荒とも言える、「三つの50」（国際学生五〇％、外国籍教員五〇％、五十カ国以上からの学生）というコンセプトで臨むことにしたのである。こうした構想に立って、新設大学の定員を八百人と仮定しつつ、国内学生、国際学生、各四百人をどう集めるか、特に国際学生をどう確保するかは、新大学の成否にかかわる大問題であった。このためには、国際学生に対する授業料の減免に相当する金額を中心とする企業からの経済支援が不可欠と考えられ、

川本八郎理事長（当時）を中心とする立命館の関係者や平松守彦大分県知事（当時）などが、企業の協力・支援を求め、これがAPUの支援組織であるアドバイザリー・コミッティー（AC）に結実することになる。これらの支援企業に拠出していたいた多額の原因がなければ、授業料の思い切った減免には踏み込めず、予定していた数の国際学生を確保することは不可能であったであろう。その意味では、APUは多数の企業の協力・支援なしには存在し得なかった大学でもある。

開学の宣言とその後の歩み

二〇〇〇年四月一日の立命館アジア太平洋大学開学宣言の後段を引用すると、「我々



APUの外観

は、21世紀の来るべき地球社会を展望する時、アジア太平洋地域の平和的で持続可能な発展と、人間と自然、多様な

文化の共生が不可欠であると認識する。この認識に立ち、我々は、いまここにアジア太平洋の未来創造に貢献する有為の人材の養成と新たな学問の創造のために立命館アジア太平洋大学を設立する。立命館アジア太平洋大学は、「自由・平和・ヒューマニズム」、「国際相互理解」、「アジア太平洋の未来創造」を基本理念として、（中略）誕生した。世界各国・地域から未来を担う若者が集い、ともに学び、生活し、相互の文化や習慣を理解し合い、人類共通の目標を目指す知的創造の場として、立命館アジア太平洋大学の開学をここに宣言する。」と高らかに謳ったのである。そして、このような開学の理念に資するべく、国際社会学に基盤を置くアジア太平洋学部（APS）と経営学に基盤を置くアジア太平洋マネジメント学部（APM）、二〇〇九年四月に国際経営学部（改称）を置くこととし、前者においては、アジア太平洋地域の多様性の理解と高い言語運用能力の上に、この地域の発展にとって重要な分野である「都市と環境」「アジア太平洋と環境」「情報メディア」について専門的に学ぶカリキュラムを用意したのであった。

二〇〇〇年四月に入学した国際学生は、韓国の五十八人を筆頭に二十五カ国・地域の二百四十三人、国内学生四百六十八人であったが、その年の秋入学の学生は国際学生が中心となったこともあり、十月には、四十六カ国・地域からの国際学生四百二十一人と国内学生四百八十四人の学生が集うことになり、五十カ国・地域からの学生の確保、国内学生と国際学生が半々という当初の目標をほぼ達成し、順調なスタートを切ることができたのであった。学生の受け入れはその後比較的安定した推移を示し、二〇〇三年には大学院生の受け入れも始まり、二〇〇四年五月の時点では、大学院生も含めて、七十二カ国・地域の千七百七人の国際学生（韓国が四百四十四人、中国が二百八十七人など）と、二千三百五十五人の国内学生を抱えることとなった。こうして順調な滑り出しを見せたAPUにとっての最初の関門は、一期生の卒業に際しての進路、特に就職がどうなるかであった。幸いにして、日本での就職を希望した国際学生は、その多くが母国語のほかに英語と日本語を使いこなせる者が多かったこともあってか、希望通り日本での就職先を

見つけることができた。また、国内学生にあっては、多文化環境の中で生活した成果をアピールできた学生が少なくないこともあってか、就職を希望した者のほとんどが就職することができた。こうした初期の成果を見て、韓国や中国など近隣諸国からのAPUへの関心の高まりもあって、二〇〇六年からは学生規模を五〇%拡大し、アジア太平洋学部とアジア太平洋マネジメント学部の両学部に加えて、クロスオーバー・アド

ヴァンスト・プログラム(CAP) (国際戦略、言語文化、健康・環境・生命、ツーリズム&ホスピタリティ、ICT [Information and Communications Technology]) を確立するということ、さらなる発展と一層の国際化を目指すこととした。学生規模の拡大に伴い、学生寮であるAPハウスの収容定員も五割拡大。約千二百人の学生が常時居住し、国際学生と国内学生が共に居住するという環境を生かして成長していくという方向性を目指してきた。こうしたこれまでの展開を踏まえ、開学後十年を経過した今日、学部のカリキュラムを大幅に見直し、今後のさらなる発展を目指して、各学部の学びの深化と明確化を図るべく、各学部の提供す

る科目群をそれぞれ四つのコースに再編することとし、APSは、環境・開発、文化・社会・メディア、観光学、国際関係、APMは、会計・ファイナンス、マーケティング、経営戦略と組織、イノベーション・経済学とする改革を二〇一一年入学の学生から実施する運びとなっている。

学びの広がりと地域との交流、 そしてグローバルな視点

世界のさまざまな国・地域から学生が集い、教員も四四%が外国籍という多文化環境の下、英語と日本語の二言語による教育システムがAPUの基本となっている。一、二回生時には、反対言語(国際学生の場合は日本語、国内学生の場合は英語)の学習に集中的に取り組みながら、基礎教育科目を受講し、三、四回生時には専門科目の授業を受けることになるが、基礎教育科目、専門科目のほとんどが日本語、英語の両言語で開講されているのである。現在「ツーリズム&ホスピタリティ」のプログラムの中で提供されている専門科目を紹介すると、アジア太平洋観光論、観光政策、観光資源評価・管理、トラベル&ホスピタリティ・

マネジメント、文化遺産管理論、エコツーリズム論、リスクマネジメントとサービスデリバリー、ホスピタリティ・マーケティング、観光開発と計画、観光法制などがある。また、こうした英語および日本語による正規科目のほか、アジア太平洋地域で使用されている六言語に関する語学教育も行われている。

APUは、学びの基本要素として、「知識」「経験」「交流」の三つが重要であると考えており、正規の授業で学習するだけでなく、実践的な学習や体験を重視するプログラムを設計し、アクティブラーニングと総称してその推進を図っているところである。これには、海外留学や言語等の研修プログラム、国内外で教員と現地調査などを行うフィールドスタディー、インターンシップなどのプログラムが含まれており、地域社会活性化のために市役所の方々と地域住民と一緒に取り組むことを中心とするゼミ活動を行っている集団もある。一例を挙げれば、日本の棚田百選にも選ばれたことのある内成地区の古い民家を別府市の支援も得て改装し、これを一般の観光客に週単位の長期貸しにして、観光客の招致と地域の活性化

	国・地域	学部学生数	大学院学生数	科目等履修生数	特別聴講生数	合計
1	中華人民共和国	758	29	0	10	797
2	大韓民国	720	2	0	13	735
3	タイ王国	218	10	0	0	228
4	ベトナム社会主義共和国	207	16	0	1	224
5	インドネシア共和国	150	32	0	0	182
6	台湾	88	3	0	4	95
7	ミャンマー連邦	70	3	0	0	73
8	モンゴル国	59	7	0	0	66
9	バングラデシュ共和国	52	14	0	0	66
10	スリランカ民主社会主義共和国	24	11	0	0	35
	その他 88 カ国	204	140	23	53	420
	国際学生 (留学生) 合計	2,550	267	23	81	2,921
	国内学生	3,266	19	18	7	3,310
	APU 学生総計	5,816	286	41	88	6,231

APU 国・地域別の学生数 (2010年5月1日付)

を図ろうというプロジェクトを実践しているゼミがこれである。

冒頭にも述べたように、APUは大分県と別府市の協力により可能となった大学であり、地域社会の国際化と活性化に寄与することはAPUの重要な使命の一つと認識している。こうしてAPUは、大分県および県内十四市町村と協力協定を締結し、中学校における英語や多文化教育の実践、地域の催し事への参加などに積極的に関与してきている。二〇〇九年度中に学生が参加した自治体・町内会などの各種の行事・イベントは約百五十に上り、さまざまな交流行事に参加した学生は一千人を超えている。また、約百八十世帯がホストファミリーとして登録してくれており、年間約百五十人の国際学生がホームステイを体験している。

現在、九十八カ国・地域からの国際学生が集うAPUのキャンパスは、それだけでミニワールドを構成しており、春学期には、各国の学生が入り交じって、週単位で、チャイニーズウィーク、コリアンウィーク、インドネシアンウィーク、ベトナムウィークといったイベントを企画し、それぞれの言語や文化を紹介している。その期間中は、ス

ポットを当てた国の伝統料理がカフェテリアに並ぶほか、伝統的な舞踊や音楽などが披露されており、別府市民の参加者も少なくない。特に各種ウィークの最後の金曜日に行われるショーには毎回多数の市民が訪れてくれている。

このようななかで、二〇一〇年四月、大分県は、「大学誘致に伴う波及効果の検証 立命館アジア太平洋大学 (APU) 開学十周年を迎えて」を公表した。これによると、学生や教職員、大学自体の支出などに伴う全体の経済効果は年間二百一十億円に上る (同報告書、P9) ほか、別府市の人口減少への歯止め、青年 (学生) 人口比の増加、国内外との交流の増進などがプラスに評価され、また県民意識調査でも七割を超える回答者がAPUの開学を肯定的に評価している (同、PP12～20)。

APUは、こうした地域社会の支援と期待に支えられて今日に至っているが、別府市郊外の山の中腹というローカル性の中でグローバルな視点が常時クロスするユニークな国際大学として、さらなる発展を目指していきたいと考えている。

(やまがみ すずむ)

九州観光推進機構のアジア・インバウンド戦略

九州観光推進機構 事業本部 本部長

大江 英夫

はじめに

政府が二〇一〇年六月に閣議決定した七つの「新成長戦略」の中に観光立国・地域活性化と合わせて、アジア展開が戦略分野に掲げられています。九州観光推進機構は、九州地方知事会と九州経済連合会、九州商工会議所連合会、九州経済同友会、九州経営者協会から成る九州地域戦略会議において策定された「九州観光戦略」の実行組織として、二〇〇五年四月に設立されました。官民合同かつ七県合同というスケールメリットを生かした観光振興策の成果が、少しずつではありますが表れ始めています。同様な組織が各地に設立されたことから、それなりの評価を得ていると考えています。九州七県と観光連盟など十四の官の組織、百四十七（八月一日現在）の民間企

業団体からの浄財と人材の提供を頂き、年間約五億円の予算でさまざまな事業を行っています。設立から三年間を第一次観光戦略、次の三年間を第二次観光戦略と位置づけ、現在、第二次戦略の最終年度です。

- ① 旅行先としての九州を磨く戦略
 - ② 大都市圏等から九州に人を呼び込む戦略
 - ③ 東アジア等から九州に人を呼び込む戦略
- の三つの戦略を主たる柱として、事業展開を行っています。

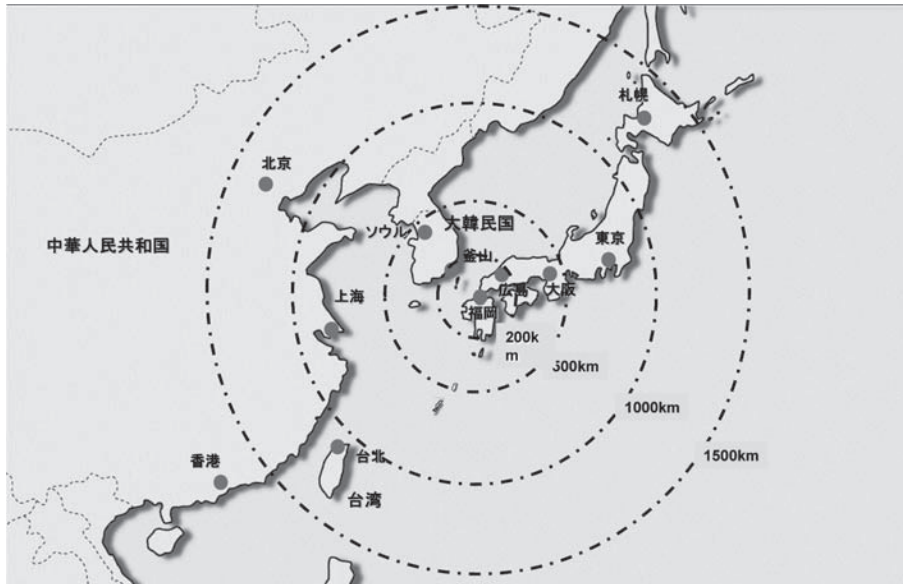
アジアからのインバウンド政策

今回の主題である、アジアからのインバウンド政策について述べると、第一次戦略では九州観光推進機構のターゲットは韓国、中国、台湾、香港の東アジアに限定されていました。設立直後であり、最も誘客効果を望める四か国に絞ったものです。第二次

戦略では、直行便もあり今後の伸びが期待できるタイ、シンガポールも対象国として、プロモーションを実施しています。

国がビジット・ジャパン・キャンペーン（VJC）で二〇一〇年に訪日外客一千万人を目標としたことから、九州ではその一〇％を目標とするということで二〇一〇年に百万人を目標と設定しました。なお、第一次戦略ではその平均伸び率を七・一％で設定し、七十四万人を目標としました。第一次の最終年は九十二万人となり目標を達成しました。第二次の目標も達成可能と思われましたが、二〇〇八年は、リーマンショックに端を発した経済不況などで大幅に入国者が減少しました。そして、二〇〇九年は、新型インフルエンザが世界的に流行したことに加え、なかでも韓国ウォンの下落で韓国からの入国者数がピーク時の五〇％

図 東アジアにおける福岡の位置



資料：国土交通省九州運輸局

ほどに激減したことにより、最終的には二〇〇七年の実績の六五%まで減少しました。二〇一〇年は、四月までの外国人入国

者数が三十一万九千三百十六人となりました。今年、韓国からの入国者数が急速に回復してきていることや、中国

発のクルーズ船の入港隻数が大幅に伸び、中国人入国者数が十万人を越す勢いであることから、二〇一〇年の目標百万人も、達成は必ずしも不可能ではない状況となつてきています。

国ごとに異なるプロモーション事業

機構は、二〇〇五年からの第一次戦略では、東アジアを中心にプロモーションを行ってきました。すなわち、韓国、台湾、香港、中国の四方国です。二〇〇八年からの第二次戦略では九州との直行便を持つタイならびにシンガポールを加えてプロモーションを行っています。そして、特に中国人訪日観光査証の枠が

緩和されると予測された二〇一〇年度からは中国人スタッフを一人増強し二人体制としました。国ごとの事業には以下のようなものがあります。

【韓国】

ウォン安と不況により二〇〇九年に前年比六〇%と大幅に減少したものの、九州の外国人入込客数に占める割合は五九%と重要なマーケットであることには変わりはありません。

九州のことはよく知られているマーケットとして認識していますので、ゴールドミスといわれる富裕層の女性を対象として「ロハス九州」と銘打った観光地・商品の開発に努めています。さらに、山登りの好きな韓国人のために九州の山々の魅力を発信したり、俳優のリユ・シウォン氏が大分県のオートボリス・サーキットにレーサーとして来ていることを韓国メディアに報道してもらうことなど、いわゆるSIT (SPECIAL INTEREST TOUR) 対策にも力を入れています。また、韓国のテレビ局と協力し、有名女優を起用して、九州は親孝行旅行に適した身近で楽しい旅行地

として紹介してもらったことなども行っています。

【台湾】

一九九〇年代に九州へのテーマパークブームがありました。ブームは去り、地道なセールスを続けていた北海道や北陸に観光客が流れており、九州は、知名度はあるものの人気はいま一つといった状況にあります。「佐賀のがばいばあちゃん」やNHKの大河ドラマ「篤姫」が再三放送されているほど人気ということもあり、映画などのメディアを通じて九州の魅力が発信がさらに求められていると認識しています。例えば妻夫木聡主演映画『悪人』の舞台が九州であることから、映画配給会社とタイアップした九州の広報宣伝活動も行っています。財団法人交流協会による台湾人の意識調査によると、台湾を除き海外で最も好きな国（地域）で日本は二〇〇八年の三八%から二〇〇九年は五二%に上がっており、二位アメリカの八%を大きく離れています。最も親しくすべき国でも三三%で、二位アメリカの三二%よりも多く、日本への関心が非常に高いことが分かります。これからは

祭りやイベントなどきめ細かな情報の発信が求められると認識しています。

【香港】

一時運航していた香港―福岡直行便が昨年五月に運休になったことに加え、キャセイパシフィック航空の台北経由便の到着時刻が遅く、また出発便も早いということから、香港人向けの九州旅行商品が作りにくい状況でしたが、ここに来て、十月末から直行便が再開されることが決定し、これからのプロモーションに力が入るところです。

【タイ】

二〇〇九年には他の地域と同様に数値を落としています。タイからは、二〇〇七年の日タイ修好百二十周年の年に前年比六九%増の一万一千人が九州を訪れ、二〇〇八年には過去最高となる一万三千人となり。週五便（十月からデリー）の直行便があることから、重点地域として認識し、認知度向上を図るため、新聞・雑誌・テレビ・ウェブなど各種媒体関係者を招聘するほか、現地の旅行関係者への九州観光説明会を開催したり、タイ国際旅行フェア

(TTAA)への出展などを行っています。

【シンガポール】

タイと同じく直行便があることから、重点地域と位置づけています。

経済成長が著しく、富裕層が増加傾向にあり、教育にも力を入れているシンガポールは、現在第二次日本ブームです。第三言語として日本語を取り入れている学校もあり、日本学習熱が高まっていることから、特に教育関係者に対する事業に力を入れています。併せて富裕層に対する旅行として、九州の雄大な自然を満喫できるレンタカーを利用した旅行商品などの企画支援を行っています。また、タイと同様に、シンガポール旅行博(NATAS)への出展を行っています。

【中国】

日本政府観光局(JNTO)の二〇〇九年の統計によると、中国からの日本への入込客数は百万六千二百人で、前年比〇・六%伸びています。主要国の中では唯一伸びている国です。九州への入込客数も八万百三十九人と前年比で一〇・七%の伸び

を示すことができました。国土の広大な中国なので、地域を①広州・華南、②上海・華東、③華北・東北と分けて担当者を設定しています。中国市場においては、九州の認知度はゴールデンルートに比べるとまだまだ低いことから、認知度向上に重点を置いて各種施策を実施することとしています。

具体的には、①認知度向上のための新聞・雑誌・テレビ・ウェブなど各種媒体を用いての情報発信およびメディア関係者招聘、②観光説明会・商談会の開催と旅行会社招聘・広告支援、③教育旅行誘致促進のための教育関係者招聘、④中国国際旅遊交易会（CITM）など現地旅行博への出展などです。ほかに九州独自の取り組みを記載すると、以下のものがあります。

(1) クルーズ誘致のための活動

九州は中国から近いという地理的優位性もあり、前述したように中国発のクルーズ客が急速に伸びてきています。二〇〇八年には八十七隻だった外航クルーズ船が二〇〇九年は百三隻となり、二〇一〇年には百五十八隻が予定されています。上海や天津から、済州島、福岡、長崎、鹿児島、

屋久島などに寄航しています。今年の主たる港の寄港回数は、博多港六十六回、長崎港四十一回、鹿児島港四十二回で、中国人を中心に十万人以上の訪問が予定されています。機構は、主たるクルーズ会社であるコスタクルーズ社に協力し、これらの販売の責任者を招聘してファムトリップを実施したり、現地での説明会への支援なども行っています。また、次回への誘致動機になるように、船中で読める九州全体のパンフレット作成への支援も行っています。

(2) 上海万博での活動

五月から上海万博が開催されていますが、九州は沖縄と合同で、日本館に併設されているイベントステージにおいて「8宝国九州・沖縄ウィーク」と題して九月二十九日から十月六日の八日間、それぞれの県からの出し物で日本館に来られた方々に九州の魅力を伝えるイベントを行うことにしています。

(3) 孫文と九州をテーマとする活動

来年二〇一一年は、辛亥革命から百年の記念すべき年となります。

日本でも中国でもあまり知られていないの

が、現代中国建国の父祖・孫文の革命活動を援助した宮崎滔天や梅屋庄吉が九州出身であることです。熊本県荒尾市には、宮崎兄弟の生家が資料館として残っていますし、孫文が残した書や滔天との筆談の記録もあります。九州観光推進機構には、二〇〇六年に孫文の生誕百四十年を記念して北京の宋慶齡基金会ならびに日本のNHKに当たる中国中央電視台（CCTV）と一緒に作成したテレビ番組「孫文と九州の仲間たち」のDVDもあります。また、八月十六日付の日経新聞文化欄に梅屋庄吉のひ孫に当たる小坂文乃さんが書かれたように、孫文をテーマにした映画製作の動きもあります。これを機会に、より多くの中国人に九州を身近に感じてもらいたいと考えています。

八月五日に日田市で開催された九州戦略委員会において、機構の第三次観光戦略が承認され引き続き九州一体となった海外誘致を行うこととなりました。今後のFIT（個人旅行）時代に向けた受け入れ体制の整備と中国からの誘客に力を入れていこうと職員一同張り切っています。

（おおえ ひでお）

観光地における図書館の役割

——観光客にも利用され、観光地の持続的発展に寄与する図書館とは

財団法人日本交通公社
旅の図書館副館長

朝倉 はるみ

二〇一〇年七月、群馬県草津温泉で図書館間題研究会の全国大会が開催されました。近年、図書館での観光ポスターの展示や観光パンフレットの配布等により、観光と図書館を連携させる動きが出てきたことや、開催地が草津温泉ということもあり、この大会の鼎談では初めて「まちづくり・観光・図書館」がテーマとなりました。今回は、草津温泉を例に、観光地における図書館の役割、まちづくりや観光における図書館の役割について考えました。

観光地「草津温泉」の町立図書館

日本三名泉の一つ草津温泉は、群馬県北西部に位置する歴史ある温泉です。湧出量の豊富さや酸性度の強い泉質で、古くから湯治場としてにぎわってきました。

草津町立図書館（以下、草津図書館）は、周辺のJR駅と結ぶバスが発着するバスターミナ

ルに隣接した町役場と同じ建物の中にあります。近くに観光案内所がないことから、観光客から施設やイベント、食事の場所等を聞かれることがよくあるそうで、観光関係のパンフレットも常備しています。蔵書の特徴は、温泉や火山に関する資料、ハンセン病に関する資料（町内に療養所があるため）、Jリーグの「ザスパ草津」に関する資料等があることです。

二〇〇九年度の来館者数は約二万三千人、貸出数は約四万五千冊でした。草津温泉には、リゾートマンションや別荘の利用者、湯治客、宿泊施設のアルバイトも多いので、住民票が草津町にないこうした方々にも「貸出利用券」を発行して、図書館利用を推奨しています。

草津図書館のスタートは、大正十年（一九二一年）、学校の一角に作られたもので、その時の規則に「浴客にも利用できる」とあります。また昭和十二年（一九三七年）に草津温泉組合が発

行した冊子「くさ津」にも娯楽施設の一つとして草津図書館が紹介されています。つまり、以前も湯治客に図書館を娯楽施設として開放して



草津図書館の「Jリーグ・ザスパ草津」関連資料の書架

いたので、こうした考え方が今の図書館にも受け継がれていると言えます。

観光施設としての図書館

草津温泉では、湯治客等、住民でない方も図書館を利用していましたが、では地元観光関係者が図書館を「観光施設」として認識しているかという点、現状ではそうでもないようです。

草津温泉観光協会のホームページでは、「観光する―観る―資料館・美術館」という分類の中で草津図書館が紹介され、「図書館は町の本棚です。草津を訪れる観光客や湯治客の方々も気軽に利用いただけます。図書館はいつでも、だれでもが気軽に訪れ、利用できる場所です」というコメントがつけられています。しかしながら、同じホームページに掲載されている「草津温泉タウンマップ」には、草津図書館は掲載されていないのです。私が地元で入手した数種類の他の観光客用の地図を確認しましたが、町役場やバスターミナルは掲載されているにもかかわらず、残念ながら「草津図書館」の文字が掲載されたものはありませんでした。

地図は、町、観光協会、旅館組合とさまざまな観光関係組織が作成しており、こうした組織

が図書館を観光施設と意識しておらず、地図に掲載されなかったと考えられます。

観光地ならではの図書館利用

草津図書館の人気資料は読み物（小説）やテレビで話題の本のことですが、ほかにも、ホテル・旅館の接客マニュアルや接遇関係の本は貸出回数が多いそうです。草津温泉には約百七十軒の宿泊施設、そして飲食店や土産物店等観光客向けの施設も多く、従業員にはアルバイトや派遣社員の方もいます。そうした方が、自己研鑽のために図書館でこうした本を借りていくようです。

観光地の図書館の役割

草津図書館の現状を参考に、観光地における図書館の役割を、住民のための図書館と、観光客のための図書館、という二つの視点から整理してみます。

I 住民と観光をつなぐための図書館

①観光関係者のレベルアップのための資料提供

観光関係者の教育はOJT（現場指導）が中心となりがちですが、現場では学べないこともたくさんあります。また、地元の情報を観光客に提供することも、大切なおもてなしです。

観光関係者一人ひとりが図書館の資料を使って自分の仕事や業界の仕組み、地元の歴史や文化を学ぶことで、観光関係者のレベルが高まり、それが観光地の魅力にもつながっていきます。

経営者や管理職は、従業員に積極的に図書館を利用して自己研鑽に励むよう推奨したり、図書館に対しても、観光地の人材育成資料や地元資料を充実させてほしい、といった働きかけも必要かもしれません。

②住民が地元のことをよりよく理解するための図書館

観光地をより魅力的に変えていく、あるいは観光地でなかったところを観光地に変えていく、という場合には、観光関係者のみならず、観光に関係のない地元住民の理解と協力も不可欠です。つまり、多くの住民が地元の歴史や伝統、そして現在の魅力と問題を理解することは、こうした観光地づくりの基本であり、そのために図書館の資料を活用してもらおうのです。市町村立の図書館は、地元の資料（郷土資料）を収集・保管していることが多く、前述したように草津図書館でも温泉や火山についての資料が充実しています。古い資料から、今後の観光地の魅力が新たに浮かび上がってくるかもしれません。

II 観光客のための図書館

①地元の観光情報提供の場合

観光客は、旅行前にインターネットやガイドブックで情報を収集しますし、観光地でも携帯電話で手軽に情報収集ができるようになります。しかし、現地に行かなければ分からないこと、一枚の地図があれば、あるいは誰かに聞けばすぐに分かることもあります。観光地にはたいがい観光案内所がありますが、観光地ではできるだけ多くの施設で観光マップやパンフレットを入手でき、誰に聞いても観光施設への道順などを教えてもらえれば、観光客にとってはとてもありがたいのです。

そこで、観光マップやパンフレットを常備すれば、図書館も観光客のための情報センターとなり得ます。公共図書館は教育委員会の所轄であることが多いのですが、観光担当部署や観光協会等と連携を取り、観光情報を提供することや、観光客が旅行前に情報収集する自治体・観光協会等のホームページやガイドブックにおいて、「図書館でも観光マップ・パンフレットをご用意しています」という情報を掲出することも必要です。また、地元で観光客が入手する観光マップやパンフレットにも図書館を必ず掲載するように、作成者も図書館を観光施設の一つと認

識し、図書館からも作成者にその掲載を依頼すべきでしょう。

一方、外国人は日本人と異なり、図書館を観光を含めた地元の情報センターと認識しているようです。例えば、二〇一〇年四月、アイスランドの火山噴火で成田空港発の欧州路線がかなり欠航となり、多くの外国人旅行者が成田空港に足止めされました。その際、彼らは成田駅から徒歩二十分（バスであれば五分）ほどの距離にある成田市立図書館までわざわざやってきて、インターネットで情報収集をしていたそうです。

現在、国を挙げて訪日外国人旅行者誘致に取り組んでいます。外国人旅行者の多い観光地あるいはこれから増やしたいと考える観光地では、図書館に誰もが自由に使えるパソコンを設置したり外国語のパンフレットを常備するなどして、図書館を外国人向け観光情報センターとして活用する、という道もあります。

②周辺観光地の情報提供の場

観光案内所は、地元の観光情報は充実していますが、周辺観光地の情報が十分でないことがあります。例えば草津図書館では、草津温泉は当然ながら群馬県内の観光情報は入手できるものの、隣接する長野県の軽井沢町や山ノ内町の情報が全くないそうです。しかし、草津温泉へは

軽井沢駅からもバスが出ていますし、特に夏期は、観光客が草津温泉に泊まって、県境や市町村境に関係なく周辺も観光します。

そこで、観光客の動きに合わせた周辺市町村の観光情報も提供し、周辺市町村には自分の観光地の情報を提供してもらう（パンフレット設置等）ことで、相互に観光客の流動を促し、広域で観光需要を分かち合うことができるのです。観光地の図書館だけでなく観光案内所等においても、相互に情報交換することで、より多くの場所で観光情報が提供できます。

このように、図書館同士が他のエリアの観光情報を提供するという試みを「観光情報エクスチェンジ」といい、二〇〇八年ごろから中国・四国地方の県立・市立図書館で積極的に行われています。例えば、岡山県津山市立図書館では、地元住民は鳥取に海水浴に行くので、鳥取県の観光ポスターを掲示し、地図や観光パンフレットを配布（図書館来館者に自由に持ち帰ってもらう）、その後鳥取県立図書館で「津山の観光展」として同じような取り組みを実施しました。来館者からは、「図書館は本を借りて返すところ」というルールでなく、パンフレットを「持ち帰れる」という点も好評だったそうです。

津山市立図書館と鳥取県立図書館の取り組み



草津図書館と愛媛県立図書館との観光情報エクスチェンジ。草津図書館において、道後温泉や松山城の歴史関連図書、ゆかりの文学作品、愛媛県内の観光パンフレットやポスターを掲示（2010年3月実施）



大分県宇佐市民図書館で行われた観光情報エクスチェンジ（草津温泉の紹介）。写真提供：草津町立図書館／撮影：宇佐市民図書館（2010年8月実施）

は、住民の旅行需要を刺激する情報提供の場として図書館が機能できるという例であり、観光地でない自治体の図書館でも取り組めます。

③観光客のための図書館の留意点

観光客に図書館を利用してもらう際には、図書館の立地を考慮する必要があります。草津図書館は観光客の利用も多いバスターミナルに隣接しており、草津温泉自体もごんまりしてい

ますので、観光客が行きやすいのです。このように、観光施設や温泉街の近くに図書館があるなら積極的に図書館で観光情報を提供すべきですが、もしそうしたエリアから図書館が離れているなら観光客の利用はあまり期待できませんので、無理に観光パンフレットを充実させるようなことはせず、従来通り住民用の図書館としての機能を充実させることが大切です。

また、住民や観光客を、動かすために観光情報エクスチェンジを行う場合は、どの観光地の情報を提供するか、住民や観光客の行動を理解した上で決めることが望まれます。

Ⅲリピーターや連泊客・長期滞在の来訪者のための図書館

日本の観光旅行の六割は一泊ですが、リピーターや連泊客、長期滞在の来訪者は滞在期間中に図書館を利用する可能性があります。公共図書館は地元住民を利用者と想定していますが、観光客が住民と同じ図書館サービスを受けられるというのは、観光地における一つのおもてなしと言えます。一晩でも本が借りられることを喜んでくださる観光客がいるかもしれません。また、雨の日を過ごす場所として、図書館を観光客にお勧めすることもできます。観光地に住む・滞在する多くの方に図書館を利用していただきたいものです。

〈参考資料〉

- 松本秀人「観光と図書館の融合（CATS叢書第5号）北海道大学観光学高等研究センター
- 『みんなの図書館』（二〇一〇年二月号）

（あさくら はるみ）



連載 I
あの町この町
第 39 回

起業精神 —— 埼玉県深谷市

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀
(イラストレーター)

深谷商工会議所・深谷商店街連合会発行の商店案内は深谷^{びいき}をもじった「深谷^{びいき}」、タイトルに「これを開くと深谷のお店のオドロキがいっぱい!」と添えてある。お店だけではない。この町にはオドロキがどっさりある。

JRの快速で東京から約一時間半。ここちよくウトウトしはじめたところに着く。深谷でとび降りて「しまった!」と思うところだ。うたた寝中に東京へ折り返したのではあるまいか? 目の前におなじみの丸の内駅舎がそびえている。

平成八年(一九九六)、リトル東京駅のつくりで竣工。赤レンガ、白大理石、青みをおびた屋根、白のワタどりをした窓、正面の大時計、そっくり丸の内である。オリジナルは目下、大改装中で幌につつまれたままだが、コピーのほうは堂々と線路を

またいで営業中。

駅前通りをしばらく行くと旧中山道とぶつかった。深谷は江戸のころ、宿場町として発展した。古い記録には宿内総家数五二四軒、本陣一、脇本陣四、旅籠八〇、宿内人別一九二八人(男八九五人、女一〇三三人)といった数字が見える。「深谷^{びいき}」のマップには、下に「天保十四年(一八四三)深谷宿まつぶ」がついていて、本陣や脇本陣をはさみ無数の旅籠が軒をつらねている。あいまに髪結、小間物、駕籠、荷運び……。

現在も旧宿の両端の常夜燈がのこっていて、それが稲荷町共栄会、仲町勉強会などの商店街をつくっている。ためしに歩くと、なるほど、「オドロキがいっぱい」だ。おおかたの地方都市は商店街に閉古鳥が鳴いていてシャッター街と化しているなかで、深谷の目抜き通りは天保十四年とかわらぬ賑わ

いを保っている。江戸後期からの米屋、元禄六年(一六九三)創業の金物店、文政年間の旅籠に由来する料理屋、明治十年からつづく茶園。ふとんを作って一六六年の寝具店、「明治大福」が名物からも老舗のほどがわかる饅頭屋。

伝統の店と肩を並べて、美容院、ブティックの店、タクシー、宅配業。かつての髪結以下が、名前をかえて健在である。「深谷宿まつぶ」の酒造屋は、いまも杉玉を軒につるしている。深谷シネマをごぞんじだろうか? 全国ニュースになったが、廃業後の造り酒屋の広大な敷地の一角に、東京のロードショー劇場そのままのシャレた映画館をつくった。NPO法人で、市民の基金がもたになったというからビックリである。

平成二十一年(二〇〇九)、町の南の郊外に「ふかや緑の王国」が建国宣言をした。



JR 深谷駅

みずから起こしたり名をつらねた事業が五〇〇あまり。よほど鋭敏な時代センスと判断力があつたにちがいない、金融、運輸、生産、流通、どの分野であれ、ことごとくといっていいほど成功させた。

深谷市は「洪沢栄一の生地」をキャッチフレーズにしている。市の北部、血洗島（ちあらいま）といふかわつた地名の土地で天保十一年（一八四〇）に生まれた。若いころ血が騒いだのか尊王攘夷の運動に加わつたが、維新後は官に出仕。新政府が早々と官僚化していくのにイヤ気がさしたのでらう、三十代はじめ実業界に身を投じた。

応募作を実際に木にとりつけ、巢作り、子育て状況をみて、それを点に加えた。写真には受賞者が用済みになつた巢箱を掲げている。汚れぐあい、それをわが家とした小鳥の暮らしぶりを伝えている。鳥を審査員に加えるという発想が、なんとまたのしいオドロキではなからうか。

県の農林研究センター（四万八千平方メートル）をゆずり受けて市民の森にした。「市民がつくり 市民が守り育てる」がスローガンで、そのとおり、ながらく放置されていって荒れ放題だったのをボランティアの力でもののみごとに甦らせた。

森の音楽祭、緑の王国写真コンテスト、巢箱コンテスト——お金よりもアイデアを盛りこんだ活動がほほえましい。「広報ふかや」八月号（二〇一〇年）に「第一回ジャパン・バードハウス・コンテスト鳥の審査の部」最優秀賞が発表されていた。

七十年代半ばで実業から身を引き、以後の二十年ちかくは社会事業に力を入れた。教育、福祉、病院、老人問題、こちらでもおそろしく先見性に富んでいた。文雅の才もあって、号が青淵。財界のボスになって権力を振いたがるタイプとは、まるきりちがう人物だった。

渋沢栄一にとっては二十代末に過ぎたヨーロッパ体験が、その後大きく影響したのではあるまいか。ロスチャイルドをはじめとして、一九世紀に登場してきた実業家たちを身近に見ていた。そのビジネスセンス、情報の収集と伝達の方法、事業の拡大の仕方、組織のあり方。彼はまた同じくロスチャイルドをはじめとして、成功者が多くの富を社会事業に振り向けるのをつぶさに見ていた。富者の権利は富者の義務に裏打ちされていること。

いかにも渋沢個人が学びとり、実践したことだが、そのような人物のあり方そのものに生地の風土が少なからずあずかっていたような気がする。地図でわかるとおり、深谷市は利根川と荒川にはさまれている。二つの暴れ川が生み出した沖積地であって、米づくりには適していない。産業はもっぱ

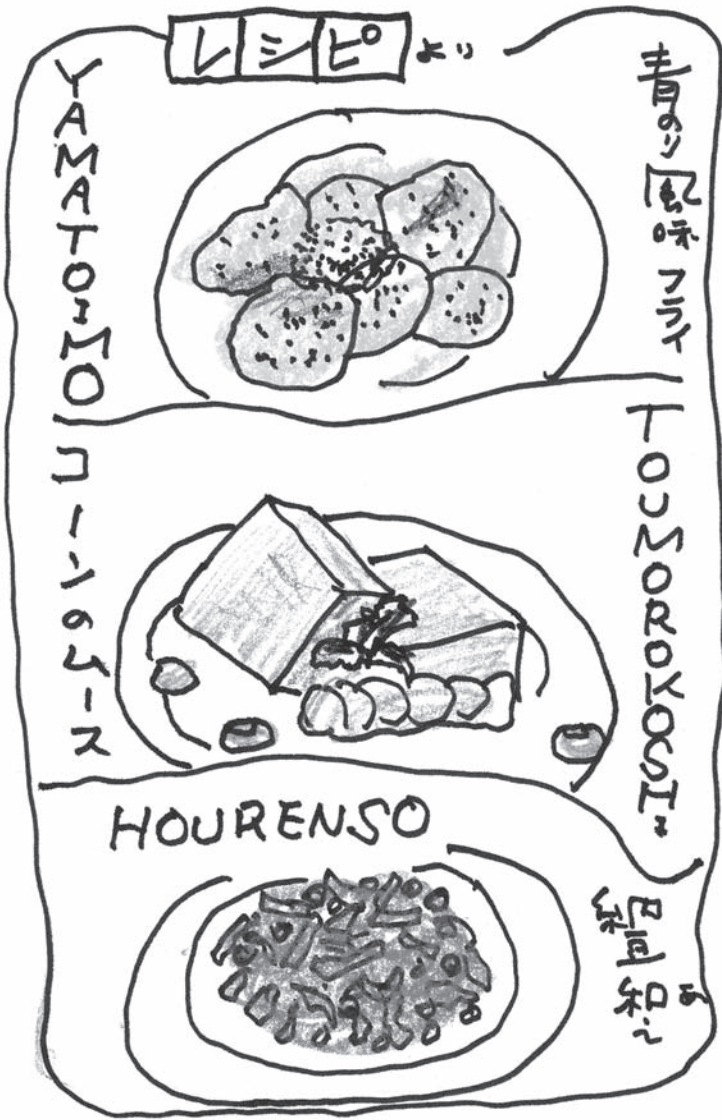


ら繭と野菜、それに藍。渋沢栄一の生家は藍玉を家業とした。

繭と藍は年ごとに相場が変動する。世の動きと市場の動向を注意深く見ていなくてはならない。宿場町深谷には、旅人とともにさまざまなニュースが運ばれてきた。市場町として繭、生糸が集まり、また散っていく。当事者しか知らない最新の情報が小聲で伝えられた。

「深谷ネギ」をごぞんじだろ。江戸期から現在にいたるまで、ネギの名品である。一流店では鍋物に、白くて長くてやわらかくて甘い味の深谷ネギが欠かせない。

都市としての江戸の成熟を見てとって、深谷の農家は栽培を特化した。ネギにかぎらない、ヤマトイモ、ホウレンソウなど、食べ物であって同時に薬用の効果もいわれる健康食品こそ、都市住民の求めるもの。要



は商品価値を高め、より速く市場に出すことである。沖積台地という悪条件を逆手にとってブランド生産を確立し、宿場町の利点を生かして大都市江戸に早々と送りどけた。

深谷市は現在、「野菜王国ふかや」をうたっている。JR駅の待合室は観光案内所を兼ねて

ねていて、観光スポット紹介のチラシといっしょに、ネギ料理、ホウレンソウ料理、ヤマトイモのレシビが手に入る。カラー写真つきの立派なもので、ファイルにすれば豪華な料理ブックができる。市当局は源平合戦のころのヒーロー、岡部六弥太の墓にもまして野菜を味わってほしいのだ。

そもそも駅舎の待合室を観光案内に併用する考え方があざやかである。待合室であれば市民が利用する。自分が住む町のことを、当の市民が知っているとはかぎらない。よそ者がよく知っていて、市に在住何十年の人がまるきり知らなかったなどのことがしばしばだ。

待ち時間のあいだに「わが町」を発見する。ホウレンソウ料理のレシビを手にとつて、明日はホウレンソウのクリーム煮を考える主婦もいるだろう。リトル東京駅の奥はいかめしい駅長室ではなく、市民の集会、行事用にあてられていて、トレパン姿の女性たちがダンスのような中国式体操をしていた。

ふつう有名な建物のコピーは気恥かしいものだが、深谷駅はてらいなく堂々としてのことだ。渋沢栄一は自分の郷里の振興を図つてだろう、明治二十年（一八八七）、深谷に日本煉瓦製造会社を設立した。これからの公共の建物や

社屋は旧来の木造ではなくレンガ造りになると見こしてのことにはちがいない。そして実際、新生ニッポンの景観は赤いレンガがつくり出した。

関東大震災がレンガ建築のよろさを証明して、ながらく下火になっていった。ところが近年、強力な接着剤の登場とともにレンガ造りが甦った。コンクリートのように冷たくなく、鉄とガラスのように機能一点ぱりでもない。赤味をおびたやさしい色合いのレンガは品がよく、懐かしさ、ノスタルジアをかき立てる。

レンガ通りが特上の町のオシャレになる。日本煉瓦製造会社は現在も健在で、新しい駅舎もその製品でつくられた。地産地消の巨大なサンプルであれば、堂々としていて当然なのだ。

町の人に旧中山道の一角をすすめられた。



中山道沿いの旧豪商の館

大谷家といつて旧家の建物がユニークである。白壁の塀の上にドイツ風の木組みと壁飾りをもった二階建てがのぞいている。よほど大切に維持されてきたのだろう、アー・デコ・スタイルから八十年ちかくはたっていると思われるのに、歳月の重みのほか

は何一つかわっていない。

洪沢栄一の生家は再建されたものというが、日本語を学ぶ外国人のための洪沢国際学園にあてられている。ここに生をうけた国際人に即して、いかにも正しい使い方である。また栄一翁ゆかりの誠之堂と清風亭

が公民館の敷地に移築されていて、一つは地区の会議室に貸し出されている。どちらも大正ロマンテイシズムを造形であらわしたような様式美をもち、ほれほれするほど優雅な建物である。かつて第一国立銀行の幹部たちが会食をした部屋で、地区の人々が運動会のわりふりや景品について相談している。

埼玉県の深谷市は、いま日本でもっとも元気のいい町の一つではなからうか。市役所で手に入れた月刊の広報誌は三十頁にちかくあって、ぎっしりつまってあふれんばかり。市民に伝えたいことがいっぱいあるからだ。

「地元のを食べつくせ！」
コラムが季節の食材のレシピを兼ねている。

「子育てワンポイントアドバイス」
保健センターの読書好きが、地味な本で見つけたところを上手にまとめている。

「深谷シティフィルハーモニー管弦楽団第4回定期演奏会」

市民オーケストラをもち、ウィーン・フィルと同じようにチャイコフスキーやドヴォルザークを聞かせてくれる。一般900円、高校生以下500円。ウィーン・フィルの料金とくらべれば、多少ヴァイオリンがト

ちつても大目にもよう。それにウィーンの面々だつて、けっこうミスをやらかしているのである。

「あなたも人権について、できること、身近なことから、小さなことから始めませんか？」

「人権政策課」が広報誌にページ半分の寄稿をしている。よほどしっかりした人がいるのだろう、人権尊重のお題目を唱えるのではなく、日常に即して親しく呼びかけている。なかの一つだが、「学歴や肩書で、人を判断していませんか？」

もう一つ。「やっぱり外国の人は……」と否定的に見ていませんか？」

しめくくりの一つで、「子どもの視点や立場」に立って話を聞くことをすすめている。たいていの親は子どもが話す途中で口出しをして、きめつけたり、叱つたりするものだ。視点や立場というとなしうだが、要は話の途中で口をはさまないこと。子どもにかぎらないが、人の話をおしまいまでじつと聞いて、意見はそのあと。人権尊重の第一歩であつて、ためしてみるとわかる、人の話を最後まで聞くのがいかに難しいか。「深谷シネマ」も半ページが用意されていて、月ごとのスケジュールとワンポイント紹介、上映時間、料金が伝えている。

深谷市はまた「ガーデンシティふかや」を名のり、通りに花があふれている。もともと植木の盛んなところであつて、業者はどっさりいるのだが、道路の花壇はNPO法人「深谷オーブンガーデン仲間」が管理している。イギリスで生まれたオーブンガーデンが日本にも根づいてきたことのおかげであつて、花好きが自分の庭を見せ合つて交流し、勉強する。花仲間の輪がひろがったのだろう、「ふかやオーブンガーデンブック、2010」は広告を入れて二四〇頁。平成十八年（二〇〇六）には全国花まちづくりコンクールで大賞をかちとつた。「ガーデンシティ」を名のるのはグテではないのである。

旧街道づたいに駅にもどる途中、明治五年創業という菓子店で「みかへり最中」にいき合つた。昔、街道わきに形のいい松があつて、旅人がきつと振り返つて見たのになむそうだ。サクツとして香ばしく、甘さがおさえてあつて口あたりがいい。いただいたお茶のうまかつたこと。

駅前広場に洪沢栄一の銅像がある。赤レンガの駅舎を背にして、やや黒ずんだプロンズの顔。平成の末裔たちの起業精神に、ほほえんでいるかのようだった。

(いけうち おさむ)



連載Ⅱ
風土燦々⑫

温泉と茅葺きの神通力(上)

宮城県石巻市北上町

ルポライター
飯田 辰彦

旧・北上町(現・石巻市)を初めて訪ねたのは、昭和から平成へと時代が変わるころではなかったか。当時、旅行雑誌で「河口の町へ」という連載を持っていて、そのシリーズ中の一カ所に北上川(追波川)河口の十三浜(北上町内)を選んだことで、今に続く縁ができたのだった。

二回目に北上を訪れた時、私は二人の青年と運命的な出会いを経験する。「追分温泉」の若主人であった横山宗一さんと、今を時めく茅葺き専門会社「熊谷産業」の常務(現・社長)の熊谷秋雄さんだった。この二人との出会いがなければ、私はその後二十年も北上に通うことはなかっただろう。当時も今も、二人は変わることなく、旧・北上町の地域経済と文化を担っている。

宗一さんが営む追分温泉は、太平洋と北上川に面する北上町の内陸部に秘湯のようにある一軒宿の鉱泉。北上川に沿って広が

る中心集落の橋浦から車で二十分、道が狭まり、溪が覆いかぶさるようにフロントウインドーに迫ってきてても、追分は一向に姿を現さない。そして、ドライバーの心細さが頂点に達するのを見透かすように、おもむろに温泉はその正体を客の目にさらすのである。

追分温泉を包む山塊は北上山地の南端部に当たり、橋浦から北進してきた県道を上りつめて峠(大峰)に達すれば、横山観音のある旧・津山町への下りにかかる。大峰の直下という位置にあって、古来橋浦と皿貝(旧・河北町)からの山道の合流点であったことから、平安末ごろにはすでに追分という地名が定着していたらしい。

宿はまさにその旧街道の分岐点上に立つ。玄関がある新館は十三年前に増築されたものであり、戦前の学校建築をモチーフにしたという外観が印象的。棟続きで左に本館

が延び、溪川を挟む形で対岸に自炊棟と大浴場が並ぶ。さすがに昨今は自炊客は数えるほどしか利用しないが、それでも主の宗一さんは頑として自炊の設備を撤去しようとはしない。「ウチは湯治場が原点ですから」と、少なくとも自炊客の便宜を図ることを、片時も忘れない。

ところで、追分温泉の開湯は宗一さんの二代前、つまり祖父の時代にさかのぼる。祖父の宗雄は一九〇四年(明治三十七年)、福島県福田村(現・新地町)の生まれ。長じて下駄職人になった宗雄は、材料(桐)を求めてしばしば北上の橋浦や十三浜に入りするようになる。一九三二年(昭和六年)ごろ、追分の谷にあった金山鉱のことを聞きつけ、友人と組んで金山の発掘に手を染める。結果は無残な大失態で、つぎ込んだ全財産をはたいてしまう。

これより先、一九二九年、宗雄は隣町



1960年代初めごろの追分温泉。湯治客たちが渡り廊下でのんびりくつろいでいる

(百理郡山元町) 出身の永谷末子をめとり、その翌年には長女恵子を授かっている。恵子さんは宗一さんの実母であり、現在も温泉の大女将として日々存在感を示している。さて、金山の事業失敗は相当こたえたと思え、宗雄は再び下駄の商売に戻り、再起を図った。

一九三八年には、石巻の下駄商仲間と共に

同で下駄履物製造業をスタートさせ、山下(石巻市内)に下駄工場を設けた。このころ妻子を福島から呼び寄せ、石巻でようやく家族水入らずの生活に入る。しかし、平和な日々は長くは続かなかった。程なく太平洋戦争が勃発し、一九四二年には徴用で石巻造船所勤務を命じられ、その瞬間に下駄工場は閉鎖。

続く四四年には応召となり、盛岡第三旅団入隊、広島で疾病除隊となり帰石。四五年を迎えると、母まさよと義弟一家が宗雄を頼って石巻に疎開してきた。そんな折も折、仙台空襲のどばつちりで、最愛の妻末子を失う。そして終戦。当時の日本人が多かれ少なかれ味わった失意と混乱の状況とはいえ、宗雄が受けた物心両面でのダメージは限りなく深かった。

その痛手の上塗りをするように、石巻に進駐してくる占領軍のためという名目で、石巻全市に疎開命令が出された。戦争はすでに終結しており、今さら疎開はないだろう、と宗雄は付きまとう不運を恨んだ。

終戦から半月後の九月一日、一同は仕方なくかつて宗雄が一攫千金を

夢見た地、北上の追分に入植した。宗雄、四十二歳の日のことである。後添いの妻を含め、総勢九人での再出発であった。

住家としたのは金山事務所跡の廃屋で、すでに杉皮葺きの屋根は見る影もなくほどけていた。夜には家の中から月や星が眺められる有り様だった。一家で開墾に精を出すも、貴重な収穫物は鳥や獣に見事にさらわれた。文字通り草の根で露命をつなく困窮生活だった。ただ、追分が属する女川地区は木炭の生産が盛んで、宗雄は製品を背負って連日近隣の土地を歩き回った。当初は食糧を求めての物々交換で、当てにならない配給と併せて、その日々をしのいでいた。

転機は、新妻の持病がきっかけで訪れる。山中での唯一の楽しみは、開墾作業の後に待つドラム缶での入浴だった。ひと冬を越したころ、妻の持病である神経痛が快方に向かっていた。不思議に思った宗雄は、たまたま追分に遊びにきていた東北大学の学生に水質検査を依頼する。その結果、何げなく使っていた山のわき水が良質の成分を含んだ温泉であることが判明。

漠然とはあったが、この時、宗雄の脳裏に、鉱泉を利用した温泉開発の青写真がひらめいた。追分温泉誕生前夜の入植地の寸描である。(いいだ たつひ)



万博軸の「陽光谷」から見る「中国国家館」

が、今は、いともたやすくインターネットでアクセスできる。

しかし、上海万博の会場の熱気と、それは裏腹の冷めた視線は、それだけが理由でもなかったのではないだろうか。

一九七〇年の日本は、人々が豊かになることで、国民の経済格差が一気に縮まった

時代だった。しかし、それは同時に戦前からの富裕層が消えていった時代でもあった。当時、そうした顧客を支えられてきた老舗ホテルが、新しい顧客を獲得するために苦勞したという話を聞いたことがある。今の中国の富裕層のような消費が再び出現するのは、二十年後のバブルである。

日本では二十年のタイムラグがあった豊かさへの歩みが一度に押し寄せているのが、中国の今ではないだろうか。

これから豊かになろうとする人たちの勢いはるかに超える勢いで、すでに豊かになった人たちが、もっともっと豊かになっていく。その巨大な経済格差は、お互いが別の星の住民かと思えるほどである。

上海には、中国の先端を走る、最も豊かで洗練されたライフスタイルがある。彼らにとつての上海万博とは、バブル経済に躍った人たちが、その二十年前の大阪万博を振り返るようなものなのかもしれない。

万博に沸く上海には、これから豊かになろうとする人たちのパ

ワーと、すでに豊かになった人たちのもっと豊かになろうとするパワーとが渾然一体となつて渦巻いていた。そもその人の数の多さと、一人ひとりの飛躍しようとするエネルギー量の多さとで、それは日本の高度経済成長を凌駕していた。

日本の旅行市場では「中国人富裕層」とひとくくりにはされるけれど、秋葉原で電化製品を大量に買っていく人たちのさらにもっと豊かな人たちがいて、彼らは、もはや必ずしも日本を向いていない。本当の富裕層を、日本の旅行市場は実は取り込めていないという声もある。

中国では、今や高級で洗練されたものを消費するのは外国人ではなく中国人だ。例えば上海の高級ホテルでは、以前、どこでも日本人担当のセールスを置いていたが、この数年、そうした職種が急速に消滅しつつあるという。中国の高級ホテルで最も客層がインターナショナルとされる上海でさえ、利用客のトップは中国人である。浦東の高層ホテルで働く日本人は、たまたま彼らが日本人であつたからにすぎない。

上海で何日か過ごすうちに私が感じたのは、日本が置き去りにされていく、えないの知れない焦燥感のようなものであつた。

(やまぐち ゆみ)

旅の図書館
新着図書紹介

リゾート再生の名人・星野リゾートの星野佳路社長による「星のや京都」の開業や、著書『大と鬼』をはじめ辛口の日本批評で知られるアレックス・カー氏の「庵」町家」による伝統文化の再生事業など、日本を代表する観光ブランドでもある「京都」をめぐる話題は相変わらず事欠くことがない。

その京都で生まれ育ち、現在はロンドンに暮らす著者が、自らの海外各都市での在住体験も踏まえ、「どこにも京都のようなタダ文化が発達した場所はなかった」と振り返りつつ、「私にとって京都のらしさは、タダの流通がことのほか多い……ところである」と断言する。

何しろ、「パリとブダペストでも日常を持つたことがある」という海外生活経験の豊富な著者が「京都みたいなタダの複合体はどこにも見当たらない」と指摘し、「お金で買えないもの、値段のついていないもの、タダで貰えるものの中にこそ、この都市の真髓が隠れている」とまで強調するのだから、もう、この本「ゼロ円で愉しむ極上の京都」(文春新書・入江敦彦著)を読むしかない。

「佐野藤右衛門邸」の桜や「竜安寺」外苑、「護国神社」の花梨、京都駅ビルの空間といった景観系の「タダ」から、「割烹おきな」のメニューや「魚津

屋」の箸、「力餅食堂」のマッチ、「開化堂」の茶匙「御多福珈琲」のコースターなど、お店の小物系の「タダ」まで、実に多種多様な「タダ」が紹介されている。

なかでも、興味深く、著者の神髓を見る思いを抱かせるのが「嵐山の河原で拾う瓦」である。

ロンドンに暮らす著者は、テムズ川の「浜辺」の水際を歩くのが大好きで、「サウスバンクの劇場やギャラリーに向くときは、なるべく干潮時に行くようにしている」という。

「テムズ川に浜辺？」といぶかしむ人もいるだろうが、ロンドンの中心部を流れるテムズ川には、海の干満の影響をそのまま受けて、引き潮の時だけさやかな浜辺が出現する。

環境問題への関心が高まり、公衆道徳もそこに発達している今でこそ、ごみを川へ投げ捨てるなど言語道断の話だが、その昔、「都心を流れる河というのは便利な水洗ごみ捨て場」だった。「川沿いの工場は廃液廃材を捨て放題。市場は腐った野菜や牛豚の骨を毎日のように放り込み、パブや飲食店も割れた食器や空き瓶なんかをばんばんと投げ入れていた」のだ。

筆者は、河原に打ち上げられている「絵付けされたタイルや陶器の欠片、河底で研磨されてバロック真珠のように滑らかなになったボトルの破

片。大量の牡蠣殻」といった漂流物の収集が「すんごく愉しい」と述懐する。

実は、京都にも「これに近い快楽が採集できる場所」として「嵐山」があり、「渡月橋あたりの桂川の河原には、ポツポツと愉しげなメモラビリアが散らばっている」。

嵐山一帯は、平安時代には貴族が競って別荘を築き、大寺院が建立された土地であり、河原に散らばる瓦片は、そうした、古の残骸なのである。「もとは屋根飾りの一部でもあったのだろう、細工が僅かに残ったやつ」を拾ったりした時の興奮に震える筆者は、そのひそやかな愉しみを「ものあはれ」の拾遺行為に他ならない……かもしれない」と書いている。

限りなく贅沢な「ゼロ円の快楽」をゲットするための35の方法を伝授する本書には、思わず「そっだ京都、行こう」と呟きたくなる。極上の京都が凝縮されている。

(挑三)



新書判 216 ページ
定価 780 円
文春新書

■「コミュニティ・ベースド・ツーリズム」研究
世界の事例に学ぶ成功の鍵

コミュニティが主体的に観光振興を行っていくあり方として、海外ではすでに知られてきている「コミュニティ・ベースド・ツーリズム」に注目し、北海道大学観光学高等研究センターとの共同研究として三年間にわたり、中国貴州省ブータン王国、ニュージーランドの三カ国でフィールドスタディーを行った研究報告書。二〇一〇年三月発行。



■旅行者動向別冊
旅行者の行動と意識の変化 1999～2008

旅行者の動きを全国規模の独自アンケートからまとめ毎年発行している『旅行者動向』をもとに、十年間の変化を改めて分析・整理したもの。十年間を通して見ることで、旅行マーケットの中長期的なトレンドが浮き彫りに。二〇一〇年三月発行。



■「京都一人勝ち」から学ぶ、創造性が魅せる観光の時代
当財団主催「旅行動向シンポジウム」採録集

全国的に伸び悩む旅行市場のなかで、二〇〇〇年以降、年々観光客数を伸ばし続け、〇一年に掲げた二〇一〇年までに五〇〇万人という目標を二年も早く達成した京都。シンポジウムでは、「なぜ京都だけが一人勝ち!?」集まる秘密を解く」と題し、京都の集客魅力について分析、議論を展開。四つの仮説を挙げて、人気の背景と仕掛けを探り、他の観光地、観光産業の活性化に役立つ普遍的な要因の発見を試みた。



本書は、シンポジウム当日の採録だけにとどまらず、企画過程やシンポジウム開催後の研究成果を「研究論文」「研究ノート」として掲載している。

二〇一〇年六月発行。
※当財団出版物のご注文はホームページからお願いします。
担当：財団法人日本交通公社観光文化事業部

電話 03・5208・4704 <http://www.jtbr.or.jp>

次号予告

地域の賑わい創出に向けて全国各地でさまざまな取り組みが行われていますが、「夜景観光」にも大きな注目が集まっています。光のまちづくりへの挑戦を、各地の活動を通じて紹介します。

調査研究だより

●今後の訪日外国人旅行者数の増加に伴い、わが国の宿泊施設が直面する課題として、①特定地域(国際観光のゲートウェイとなる空港を有する都道府県等)やオンシーズンの人気観光地における外国人旅行者の宿泊需要の増大集中化、②外国人旅行者の急増に伴うさまざまなレベルのコミュニケーションの必要性特に緊急時の対応、③アジア旅行者の増加に伴う誘致・受け入れ態勢の整備、④個人旅行者の増加に伴う誘致・受け入れ態勢の整備、⑤旅館の国際化・グローバル化対応、⑥外国人旅行者のニーズに対応した多様な宿泊施設の充実等が想定されます。

●二〇一〇年三月、観光庁は、訪日外国人旅行者の受け入れの中核である宿泊施設に関する提言「訪日外国人旅行者数のさらなる拡大に対応した宿泊施設のあり方」を公表しましたが、今後は同提言に基づき、国・整備」を公表しましたが、今後は同提言に基づき、国・地方自治体・宿泊関係団体等がそれぞれの役割分担の下で連携・協力し、わが国の宿泊施設の魅力を高めていくことが期待されます。

(渡邊)

編集後記

◆アジア経済の躍進ぶりが顕著です。ビジット・ジャパン・キャンペーン(VJC)の目標数値達成の成否も、アジア・インバウンドの成果いかんにより左右されます。本号では、地理的に、また古代より文化的・経済的に東アジアと深く緊密な関係で結ばれた九州に着目して、アジアとの人的交流の現状と取り組み、その拡大策を探りました。

◆国別で見ると、福岡・釜山間に航路を有する韓国が圧倒的なシェアを占めています。五月末に太宰府天満宮参拝の折に触れ合った韓国の若者二人連れから大学合格祈願に訪れた旨、日本語で語りかけられた時は、九州と韓国の身近になった交流に驚いた次第です。アジアからの観光客で活況を呈する福岡市天神地区の「新天町商店街」では、外国人接客のハンドブックや英語・韓国語・中国語の商店街マップを作成して好評を博しています。

◆明年三月には博多から鹿児島中央まで九州新幹線鹿児島ルートの中線が開業します。九州は、世界最大級のカルデラを擁する阿蘇山を代表とする大自然、温泉、食、産業近代化遺産など豊かな観光資源に恵まれています。九州全域が今まで以上に一体となった九州ブランドの発信が求められる好機が訪れています。

(宇八)



観光文化 第203号

第34巻5号通巻第203号

発行日 2010年9月20日

●
発行所：財団法人 日本交通公社
東京都千代田区丸の内 1-8-2
第一鉄鋼ビル
〒100-0005 ☎ 03-5208-4701
<http://www.jtb.or.jp>

編集室：東京都千代田区丸の内 1-8-2
第二鉄鋼ビル 旅の図書館内
〒100-0005 ☎ 03-3214-6051
<http://www.jtb.or.jp/library/>

編集人：外川宇八
発行人：新倉武一

●
印刷所：JTB印刷株式会社

禁無断転載

ISSN 0385-5554